女王キリエ

カイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女王キリエ

【Ｎコード】
Ｎ３３９１Ｚ

【作者名】
カイリ

【あらすじ】
修道女として育てられた孤児キリエ。ある日キリエの元にジュビリーと名乗る黒衣の伯爵が現れる。彼は、キリエが崩御した国王の庶子であると告げ、王位を継承させるために王都へ連れてゆく。しかし、王宮に到着したキリエたちを、彼女の異母兄レノックスの軍勢が襲う。ジュビリーによってその場を脱したキリエは、教会へ帰ると言い出すが、彼は思わぬ告白をする。
「国王には嫡男がいたが死んだ。私が殺したのだ。おまえを女王にするために」

異母兄姉たちとの死闘。隣国の侵攻。異国の王太子との出会い。大陸の覇者との対峙。

キリエは、数奇な運命に翻弄されながらも、王位を目指す。

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第1話

息を弾ませながら、少女は古い石段を上がっていった。

修道女特有の頭布（ウィンプル）を被り、質素な黒いローブをたくしあげ、一段一段上がってゆく。ようやく最上階まで上がると、そこには青い帳が降りかけた夏の夕空が広がっていた。見下ろすと広大な農地が広がり、仕事に勤しむ農夫たちの姿がちらほらと見受けられる。もっと遠くに目を移すと、ところどころ黒々とした森が広がっている。

少女は、おもむろに鐘から伸びている紐を手に取ると力いっぱい引っ張る。殷々とした鐘の音が鳴り渡り、帰り支度をしていた農夫たちが作業の手を休め、祈りを捧げ始めた。少女も両手を胸で合わせ、一心に祈りの言葉を呟く。やがて顔を上げると、再び外を眺める。

彼女は、この鐘楼で鐘を鳴らすのが大好きだった。教会から出たことがない少女にとって、唯一広い世界を眺めることができるのが、この鐘楼だったのだ。もっとも、信仰の世界で生きることに喜びと誇りを持つ彼女にとって、外の世界は憧れを持つと同時に恐怖を感じる世界でもあった。

少女は――まだ十三か十四ほどの年頃――、鐘楼の窓辺に手をついてわずかに身を乗り出した。大きなアーモンド型の瞳が興味深そうに農夫たちの動きを追う。彼らとは親交があった。農作物や生活必需品を教会に運んでくるのだ。彼らは朗らかで、自分の知らない世界の話をよくしてくれた。そして同時に、生活の苦しさや、今起こっている戦争についての不安も漏らしていった。

神聖暦一四九三年六月。アングル王国。

プレシアス大陸の西に位置する島国アングルは今、大陸の王国ガリアの内戦に参戦していた。ガリア王リシャールに対し、嫡男である王太子ギョームが反旗を翻したのだ。リシャール王は亡妻の兄であるアングル王エドガーに救援を要請し、それに応じたエドガーは

庶子であるルール公レノックス・ハートを派遣した。
〈冷血公〉の異名を取るレノックスの数々の残虐行為はこの地にも伝えられていた。普段から暴力的なこの青年は無類の白兵戦好きであり、異国の戦争に喜び勇んで出陣していったという。この村からも数人の若者がガリアに向かったが、それは名を上げるためではなく、出稼ぎも同然であった。
少女が田園を見渡していると、一頭の馬が畦道を教会に向かって駆けてくる。急を知らせる馬か、かなりの速さだ。やがて馬は教会の中へと入っていった。何があったのだろう、少女が不安そうに見下ろしていると、
「キリエ！」
鐘楼の下から声が上がる。
「いつまで鐘楼にいるつもりです？」
「はい！」
キリエは慌てて返事をすると石段を駆け下りる。そこには美しい修道女がひとり佇んでいた。
「食堂の手伝いをしておあげなさい」
「はい！」
キリエが元気の良い返事を返し、食堂へ向かおうとすると、先ほどの馬に乗った若者が急ぎ足で司教の書斎がある建物へ向かう姿があった。
「ロレイン様……。何かあったのでしょうか」
キリエの問いかけに、ロレインが顔をしかめる。
「……悪い報せでなければ良いのですが……」
ここはアングル王国グローリア伯領のロンディニウム村。村に入ってくる情報はまず、この教会に伝えられる。アングルがガリアの内戦に参加することが決まった時もここに伝えられ、村の若者たちが次々と戦争へ出かけていったのだ。キリエはその時のことをよく覚えていた。
キリエは孤児だった。教会付きの司教ボルダーの話では、十四年

前にこの村の近くで拾われ、ここロンディニウム教会に託されという。以来教会から出ることなく、修道女として暮らしている。戦争が長引けば自分のような孤児が増えるだろう。キリエは胸を痛めていた。

教会に持ち込まれた情報が明かされたのは、食事の準備が整った頃だった。

「皆、食事の前に話しておかねばならぬことがある」

陰鬱な表情のボルダー司教が低い声で語り始めた。キリエを初めとする修道女や修道士たちは、黙って司教の言葉に耳を傾けた。

「つい先ほど、王都イングレスから早馬が着いた。……国王陛下、エドガー・オブ・アングル様が、身罷られたそうだ」

その場にいた人々から驚きの声が上がる。エドガー王といえばまだ五四歳だ。

「昨年あたりからお体の調子が思わしくないとは耳にしていたが……、まさかあの御歳で身罷られるとは……」

キリエは眉をひそめ、顔を伏せると手を合わせて祈りの文句を呟く。ひとしきり祈りを捧げ、顔を上げると険しい表情をしたロレインの姿が見えた。

国王エドガー・オブ・アングルはあまり人徳に優れていたとは言えない人物であった。数多くの愛妾を囲い込み、王妃であるベル・フォン・ユヴェーレンとは諍いが絶えなかった。誇り高い大陸の大国ユヴェーレンの王女であるベルにとっては、愛人に現を抜かす夫に我慢がならず、王宮プレセア宮殿では陰湿な陰謀が常にはびこっていたという。

だが、そんな愚王にも長所はあった。教会や修道院、施薬院などには少なからず援助を行っており、貧困層にはそれなりの人気があった。地方の小さな教会に過ぎないこのロンディニウム教会にも、毎年かなりの援助金が下りている。

横柄だが陽気なこの王は、よく王都イングレス市内に出かけては薄汚い居酒屋に現れ、人々を驚かせていた。そして、その豪快さと

は裏腹に外交に関してはしたたかな面を併せ持ち、大陸の列強に対してうまく渡り合う技量を兼ね備えていた。現在の戦乱の世にあって、小さな島国に過ぎないアングルが独立を保つことができるのも、一にかかってエドガーの手腕の成果であった。

「どなたが王位を継承されるのかはまだ決まっていないということだが……、今は亡きエドガー王陛下のご冥福を皆で祈ろう」

王位……。

キリエはぼんやりと考えた。あの悪名高い冷血公レノックスはエドガーの庶子だ。まさか、この男が王位に就くなんてことは……。

いつにも増して重々しい雰囲気の中で食事が済むと、キリエはいつものように図書室へと向かった。この時間に聖典を読み、自習するのが毎日の日課だ。

「キリエ」

図書室へ向かうキリエにロレインが声をかける。

「今日はもう遅いから休みなさい」

「え、でも……」

「今日のあなたは……、少し疲れているように見えます。明日に疲れを残さぬよう、休みなさい」

キリエはきょとんとした表情でロレインを見上げた。自分では特に疲れを感じてはいない。だが、日頃から細やかな気配りができるロレインだ。自分の疲労を感じ取ったのだろうか。

「では、お先に休ませていただきます。おやすみなさい、ロレイン様」

「おやすみ、キリエ」

深々と頭を下げ、自室へ向かうキリエをロレインが黙って見送る。

「……ロレイン」

不意に声をかけられ、ロレインがぎくりと振り返る。

「……司教様」

廊下の角から、暗い表情のボルダーがゆっくりと歩み寄る。

「……ついに、この日が来たな」

「……はい」
ロレインが苦しそうな表情で呟く。
「こんなにも早く、この日がやってくるとは思いも寄りませんでした……」
ボルダーも溜め息をつきながら頷く。
「……明日にも迎えが来るだろう」
「準備をしておきます」
「頼む」
ロレインは一礼すると、踵を返した。

翌朝、薪を納めにきた農夫がキリエに愚痴をこぼしていた。
「聞いたかい、王様が亡くなった話」
「ええ、昨夜」
農夫は手際よく薪の束を運びながら顔をしかめる。
「まだ五四だとよ。しかも、お世継ぎを決めずに亡くなっちまったんだから、一体これからどうなるんだか。イングレスじゃあ、商人どもが右往左往しているらしいぜ」
「何故？」
不思議そうな表情で聞き返すキリエ。
「そりゃあ、王様に金を貸していた商人たちが少なからずいたってことさ」
「お金のことよりも戦争の方が心配だわ。ガリアの内戦から手を引いて下さるのでしょうか」
「どうかなぁ」
農夫が頭を掻き毟る。
「ルール公はすぐに帰ってくるだろうな。そうなりゃ村の若い者も帰ってこられるが、あの冷血公は帰ってこなくてもいいんだがなぁ。いっそのこと、ずっとガリアに残ってくれりゃあな」
「リシャール王は残って欲しいだろうな」
馬の世話をしていた修道士が口を挟む。

「そりゃ、内戦がまだ続いてるんだからなぁ。アングルの他に援軍を頼める国はないし」
「レオン公国は？」
キリエの言葉に、農夫と修道士が目を丸くする。
「だって、確かリシャール王の弟君のお妃は、レオン公国の姫君ではなかったのですか？　レオン公国からの援軍は望めないのでしょうか」
「驚いたなぁ、キリエ」
農夫が陽気に笑い声を上げる。
「そんなこと誰に教えてもらったんだい」
「ロレイン様に色々教えていただいたもの」
キリエが誇らしげに答える。
「他の教会区に移ることがあっても、恥ずかしくないようにって、ちゃんと勉強しているんですから」
「なるほどな」
そう返事を返すものの、農夫は腑に落ちない表情で幼い修道女を見下ろした。他の教会区に移るどころか、キリエは普段教会の敷地内から出ることを禁じられている。教会を出るのは、秋の収穫祭の時だけ。他の修道士や修道女は積極的に村で奉仕活動をしているというのに、どういうわけかボルダー司教はこの少女を教会から出したがらなかった。
「しかしな、レオンはガリアの応援には行けないよ。ほら、レオンはエスタドの属国だろう？　エスタドのガルシア王はガリアが大嫌いだからな。宗主であるガルシア王の機嫌を損ねるようなことはしたくないんだろうよ」
「そうそう。ギョーム王太子が、ガルシア王の娘との縁談を断ったからな」
「そんなことが？」
「それでリシャール王が怒ってギョーム王太子をなじって……、で、内戦になったんだろう？　迷惑な親子喧嘩さ」

親子喧嘩。親の顔も名前も知らないキリエにとっては、血の繋がった親子が国を二分する戦争を引き起こすなど、とても理解できなかった。父親に反逆したギョーム王太子とは、どんな少年なのだろう。

「それで、問題はこのアングルの次の王様さ……。ルール公だけは勘弁してもらいたいもんだ」

農夫や修道士が国の未来をああでもないこうでもないと言い合っているのを、キリエは黙って聞いていた。だが、教会から出たことがない彼女にとっては、どこか遠くの出来事を聞いているようだった。

現在、プレシアス大陸ではこのガリア内戦が最も大きな戦禍を引き起こしているが、戦争が起こっているのはこのガリアだけではない。

キリエたちが信奉するヴァイス・クロイツ教の聖都クロイツはユヴェーレン王国の自治都市だったが、分離独立を宣言。その独立を許さないユヴェーレンとの間では五十年越しの戦争が続いている。さらに、ユヴェーレンは隣国カンパニュラ王国にも王位継承に横槍を入れ、戦争状態に突入して十年になる。

大陸にはその他、ポルトゥス王国やナッサウ王国、ガリアの属国バーガンディ公国など、小さな国々が寄り集まっている。ここ五十年の間では戦乱が絶えず、長らく平和な時代が訪れていないが、ここへきて大陸の覇権を得ようと台頭してきたのが、大国エスタド王国のガルシア王だった。彼の父、先王カルロスがその土台を築き、息子ガルシアはそれを基盤に一挙に領土を拡大した実績があった。彼はプレシアス大陸の統一を目論み、ヴァイス・クロイツ教最高指導者ムンディ大主教と対立している。

「ああ、そうだ」

不意に、農夫が明るい声でキリエに呼びかける。

「悪いけどキリエ、おまえさんの薬草をまた分けてくれないかな。代わりに、うちで作ったチーズをいくらか持ってきたんだが」

キリエの顔が明るくなった。

「まぁ、ありがとう！　どの薬草を持っていかれます？」

その頃、教会の門に馬車の一団が到着していた。派手さはないが、明らかに高位の者が使う馬車の到着に、門番たちは困惑して立ち尽くしていた。馬車から一人の青年が降り立つと、恐々と歩み寄ってくる門番に名を名乗る。

「私はジョン・トゥリー子爵。ボルダー司教に目通り願いたい。クレド伯爵ジュビリー・バートランド様がおいでになったと言えば、わかるはずだ」

「クレド伯……？　しょ、少々お待ちを……！」

この村はグローリア伯領に属しているが、クレド伯領といえば隣の領地だ。何故このグローリア伯領に、しかもこんな小さな教会に？　門番たちは不思議に思いながらも慌てて司教に知らせに走った。

「……静かな村ですね」

ジョン・トゥリーは、周りを見渡すと呟いた。後ろからもう一人の男が馬車を降りて歩み寄ってくる。

「……そうだな」

男は三十代半ばほどで、黒髪黒瞳。身にまとっているのも黒い胴衣（ダブリット）で、全身黒尽くめに近い。綺麗に整えられた口髭と顎鬚。思慮深そうな額。鋭い目。どこか近寄りがたい空気を醸し出している。それに対し、ジョン・トゥリーは明るい栗毛に鳶色の瞳。見るからに実直そうな好青年だ。

「クレド伯……！」

二人の背後から、ボルダー司教の緊張した声が投げかけられる。

「こ、こんな所でお待たせして……、申し訳ございません！」

「構わん。教会がみだりに外部の者を入れないことぐらい知っている」

冷たく言い放つジュビリー・バートランドに向かって、ボルダーは改めて深々と頭を下げた。少し遅れてロレインがやってくる。険しい表情の修道女は、ジュビリーを凝視すると黙って一礼した。

「お早いお着きでしたな……」
ボルダーがジュビリーを中へ案内する。
「明け方にすぐ発った」
「お疲れでございましょう。少し休まれては……」
「時間がない」
「はっ」
一言一言が鋭い棘のように言い放たれ、ボルダーは強張った顔のまま、教会の庭に面した渡り廊下を進んでいく。その時、庭の奥で歓声が上がった。
「キリエ、相変わらずおまえさんの薬草園はすごいな！」
「そんなことないわ。もう少し種類を増やしたいのだけど。どれをお持ちしましょうか」
「えぇと、カモミールとサンザシあるかい」
「乾燥させたのがまだたくさんあります。今、持ってきますね」
その様子をジュビリーが黙って眺める。ボルダーはおずおずと声をかけた。
「……あの娘です」
「そのようだな」
じっとキリエを見つめるジュビリー。その目が静かに眇められる。幼い修道女は自分が育てた薬草たちを誇らしげに眺め、明るい笑顔で農夫と談笑している。小柄だが、花のように咲くその笑顔にその場が自然と明るくなるようだった。ボルダーが耳打ちすると、ロレインが前に進み出て声高に呼びかける。
「キリエ！」
「はい！」
「あなたにお客様がいらっしゃっています」
「お、お客様、ですか？」
キリエは困惑の表情を浮かべた。孤児のキリエに訪れる者などいない。畑を出ると渡り廊下までやってくるが、その顔は不安に満ちている。

キリエは、司教の後ろに佇んでいるジュビリーとジョンに視線を投げかけた。ジョンはにっこりと顔をほころばせたが、ジュビリーは冷たい瞳のまま無言で見つめてくる。眉間に皺を寄せた険しい表情の男を、キリエはじっと見上げた。誰だろう。キリエの不安はますます膨れ上がった。ロレインはキリエの服装にちらりと視線を走らせた。

「服を着替えましょう。着替えてから司教様のお部屋へ」

「は、はい」

ロレインはキリエの肩に手を添えると、その場から連れ出した。

「ロレイン様……、あのお方は、どなたですか？」

「……お会いになればわかります」

言葉少なげに答えるロレイン。一体これから何が起こるのか。キリエは突然のことに戸惑いながら自室へ戻る。替えのローブを取り出すが、ロレインがそれを遮る。

「それではなく、こちらに着替えなさい」

「え、でも、それは……」

ロレインが取り出したのは祭礼用の白い衣装だった。これは、教会に高貴な人物が訪れた時にも着用することがあった。

「粗相があってはなりません」

「は、はい」

祭礼用の衣装を着るということは、あの男性は相当な身分なのだろうか。キリエは黙りこくって着替えを済ませた。

司教の部屋まで来ると、ロレインが扉を静かに叩く。

「お待たせいたしました」

「入りなさい」

ボルダーのしわがれた声が返ってくる。キリエは緊張で喉の渇きを感じながら、恐る恐る部屋へと踏み入った。

部屋の中央にボルダーとジョン。ジュビリーは奥の窓から教会の庭を見下ろしていた。そして、ゆっくりと振り返る。

「……」

ジュビリーの鋭い目にキリエは思わず息を呑んだ。一八五センチはあるだろうか。小柄なキリエは巨人でも見上げるような表情で彼の顔つきを窺った。
「キリエ、こちらはクレド伯爵ジュビリー・バートランド様。そして、ジョン・トゥリー子爵。……ご挨拶して」
言われるままにキリエは胸の辺りで両手を合わせ、軽く片膝を付いて最敬礼した。
「キリエと申します。天なる神に、お恵みと今日の出会いに感謝いたします……」
そう言って立ち上がろうとした時、キリエは思わず「きゃっ」と悲鳴を上げた。彼女の右手をジュビリーが手に取ると、その場に跪いたのだ。思わず引っ込めようとした指先をジュビリーが握り締める。
「……！」
ジュビリーは上目遣いにキリエを見つめ、ゆっくりと挨拶を述べた。
「……お迎えに上がりました。レディ・キリエ・アッサー」
「はっ……？」
手を握られたまま、キリエが戸惑いながら聞き返す。ジュビリーは目を眇め、怯えた表情の修道女を探るように見つめた。やがてすっと立ち上がると、静かに口を開く。
「今から言うことを良く聞くのだ」
「は、はい」
「私とそなたは遠縁に当たる」
「え……」
キリエは眉をひそめた。
「そなたの母はレディ・ケイナ・アッサー。グローリア伯爵ベネディクトの令嬢だ」
「え……、ま、待って下さいっ」
キリエが慌てて口を挟む。

「お人違いですっ。私は孤児で、ファミリー・ネームがありません。洗礼名だって、司教様がお付けになったもので、私……」
「ベネディクトが、身分を隠して育てるよう言い含めてここへ預けたのだ。そなたが二歳の時、母であるレディ・ケイナが病死したためだ」
冷たく乾いた声で淀みなく言い放つジュビリーに、キリエは思わず顔を引きつらせて後ずさる。何……？　このお方は……、何故こんなことを言うの……？
「身分を隠す必要があったのだ。そなたの父親は……、昨日身罷られた国王陛下、エドガー・オブ・アングル様だ」
「……は……？」
キリエの両目が大きく見開かれ、思わず背後のロレインを振り返る。が、ロレインは苦しげに目を閉じ、俯いている。
「もちろん、陛下には王妃がいらっしゃる。だから、そなたは庶子ということになる。だが、陛下には嫡子がいらっしゃらない。つまり、そなたはアングル王国の王位継承権を有しているのだ。そなたには、イングレスのプレセア宮殿で王位を宣言する権利が――」
「やめてッ！」
「……」
キリエが思わず上げた叫び声にジュビリーは口を閉ざしたが、その表情は微塵も変わらない。
「ひ、ひどいわ……」
キリエはかすれた声で呟き、顔を横に振る。
「私が、世間を知らない修道女だと思って……、そんな、で、でたらめを……。陛下に対する、冒涜ですッ！」
「キリエ」
ボルダー司教がなだめるように声をかける。ジュビリーはじっと幼い修道女を見下ろし、口を開いた。
「……時間がないのだ、キリエ」
「……」

「今から、この国は大きく揺れ動く。そなたを含めて王位継承権保持者は五人。一人はすでに継承権を放棄しているが、エドガー王は後継者を指名せずに崩御された。王位継承までに国が乱れれば、近隣諸国に付け入る隙を与えることになる」
「で、でも、証拠が……」
「証拠？」
キリエはごくりと唾を飲み込むと、必死に訴えた。
「私が、国王陛下の娘である証拠なんて、何も、ないじゃないですか……。私みたいな修道女に王位継承権なんか、皆が認めるわけがありません！」
「蝶の紋章だ」
キリエの言葉を遮るように、ジュビリーが言い放つ。その瞬間、キリエは言葉を飲み込み、黙り込んだ。そして、見る見るうちに顔から血の気が引いてゆく。
「蝶の紋章をあしらった指輪を持っているはずだ。蝶はアッサー家の紋章。本来アッサー家の紋章は青い蝶だが、そなたが持っているのは赤い蝶のはず。国王はそなたの誕生を祝い、王家の紋章である〈赤獅子〉にちなんで、赤い宝石で蝶をかたどった指輪を作らせた」
「あ、ありません、そんなの……。持っていません！」
明らかにうろたえた表情のキリエが叫ぶ。ジュビリーは辛抱強くキリエを見つめていたが、やがて、傍らに控えているボルダーを見やる。
「……ボルダー」
「……」
ボルダーは眉間に皺を寄せ、沈黙していたが、やがて諦めたように天井を仰ぎ見た。
「……ネックレスにして……、首から下げております」
それを聞くとジュビリーが大股に歩み寄り、キリエは恐怖に顔を引きつらせて後ずさった。
「いや……、来ないで……！」

すると、背後からロレインがキリエの腕を掴む。
「キリエ……」
「ロレイン様……！　放して……！　お願い……！」
泣きながら懇願するキリエを、ロレインは口を引き結び、目を閉じて必死で抱きすくめた。ロレインにもうどうすることもできない。キリエは絶望して再びジュビリーを見上げた。
「もう一度言うぞ。時間がないのだ」
「……」
「放棄した一人を除いて、他の者は皆、王位にふさわしい人間ではない。アングルの未来を、闇に閉ざすわけにはいかないのだ」
「で、でも……」
「それからもうひとつ。おまえの祖父、ベネディクトはもう長くない」
「！」
キリエが体をびくっと震わせる。
「十二年間、おまえに会いたくても会えなかった。……おまえに会いたがっている。今会わねば、後悔するのはおまえだ」
「……」
キリエはうな垂れると深呼吸を繰り返した。頭ががんがんと割れるように痛い。耳鳴りが響き、気が遠くなりそうだ。しばらく俯いていたキリエだったが、やがてゆっくり顔を上げると、そっと右手を首元に這わせた。指先が鎖を探ると手繰り寄せる。キリエの小さな手に大振りな指輪が現れる。金の台座にルビーの蝶が輝く。ジュビリーの背後に控えたジョン・トゥリーが思わず息を呑む。
「……心配するな」
ジュビリーが低く囁いた。
「おまえの身は、私が守る」
そう言うと、右手を差し出す。キリエはその手をしばらく見つめ、やがて恐る恐る手を取る。部屋を連れ出されようとするキリエに、背後からロレインが名を叫ぶ。

「キリエ！」
振り返ると、ロレインが小走りに駆け寄り、キリエを抱きしめた。
「この日が来なければと、ずっと祈っていました……！」
「ロレイン様……」
では、ロレインは知っていたのか。自分が王の血を引く娘であることを。だが、そんなことはもうどうでもよかった。
「いいですね。良き女王におなりなさい」
女王。その言葉に、キリエはぞくりとした。
「……良いか」
ジュビリーの声に、二人は体を離した。
「……お行きなさい」
ロレインが囁く。キリエは頷くと、ゆっくりジュビリーを振り返った。再びジュビリーはキリエの手を引くと、部屋を出ていった。
「……キリエ……！」
ロレインは顔を覆うとその場に蹲った。その後ろで、相変わらず暗い表情をしたボルダーが無言で立ち尽くしていた。

三人は馬車に乗り込むと、一路グローリアの城に向かった。キリエは緊張に顔を強張らせたまま、黙りこくって馬車に揺られている。窓からそっと外を見上げると、住み慣れた教会がどんどん遠ざかってゆく。
しかし、今思えば確かに自分は教会で奇妙な扱い方をされていた。村の中央に位置する教会にいながら、キリエは教会を出て村を訪れることも許されていなかった。年に一度、秋の収穫祭に参加することを許されていただけだ。他の修道士や修道女は、積極的に村に出て奉仕活動をしていたというのに……。それが許されていなかったのは、自分がまだ幼い故だと信じきっていたのだ。それが今、自らの出自を聞かされ、強引に教会から連れ出され、まったく見知らぬ土地へと連れて行かれようとしている。キリエは、孤独と不安で押し潰されそうになった。

「……キリエ様」
キリエの緊張を解こうと、ジョンが優しく声をかける。
「その……、指輪はずっとそうやってネックレスに？」
問われてキリエはおずおずと顔を上げる。
「……司教様が……、私を拾った方がくれたものだと仰って……。大事に持っていなさいと……」
「なるほど」
「……まさか、そんな指輪だったなんて……」
泣き出しそうな声でキリエがそう呟き、ジョンは気の毒そうに眉をひそめる。
「大丈夫ですよ。その指輪はこれからあなたの立場を守って下さるものです」
キリエは、ジョンの隣に視線を向けた。黒衣の伯爵は小さな窓から流れゆく風景を見つめている。その表情は相変わらず冷たい。
「グローリア城までもう少し時間がかかります。どうぞ楽になさってください。……ベネディクト様も心待ちにしておられます」
つい先ほど初めて聞いた祖父の名前。今まで天涯孤独だと思っていたキリエは激しく心が乱れていた。ケイナ・アッサー。ベネディクト・アッサー。そして、ジュビリー・バートランド。母親だ、祖父だ、遠縁だと言われても、あまりにも突然のことで理解できない。自分は、一体何者なのだ？
キリエはそっと窓から外を眺めた。木々の間から、遠くに家々がぼんやりと見える。やがてそれらの数が目立ってくる。教会を出て一時間ほど経っただろうか。やがて道は幅が広くなり、辺りの雰囲気が変わったことに気づいた。
「着いたぞ」
今まで沈黙していたジュビリーが短く言い放つ。キリエが少し身を乗り出すと、石造りの城が立ちはだかっているのが見える。灰色の堅牢そうな石壁。主塔には青い蝶が描かれた紋章旗がはためいている。

しばらく馬を走らせると、やがて馬車は城門をくぐり、中庭へと入ってゆく。中庭には兵士と思しき男たちや従者たちが大勢忙しなく走り回っている。そして、馬車に気づいた者たちが馬車から顔を覗かせている少女を見つけ、口々に何かを言い合っている。ジュビリーはそれに気づくとすぐに窓のカーテンを引いた。キリエは、今までに見たこともない人の多さに再び恐怖心が頭をもたげてきた。

騒がしい中庭を抜けると、ようやく馬車は停まった。ジョンが手を添えて降ろすと、キリエは恐々と辺りを見渡した。ロンディニウム教会など比べ物にならないほど巨大な城が目の前に屹立している。それだけでも、キリエの恐怖心は頂点に達した。

やがて、塔の門からたっぷりとしたローブをまとった男が、数人の騎士を従えてやってくる。

「ありがとうございます、クレド伯」

ローブの男が一礼する。五十代半ばほどに見えるこの男は、キリエに視線を移すと恭しく跪き、彼女の右手を取る。

「レディ・キリエ。ご無事のご帰還、何よりでございます。グローリア城代家令フランシス・レスター男爵にございます」

レスターはしっかりした体格で、灰色の髪。奥まった目から探るようにキリエを見つめてくる。そして、少し感慨にふけるような口調で呟く。

「……大きゅうなられましたな」

「……」

わずかに首を傾げるキリエに、横からジュビリーが声をかける。

「レスターは、おまえの祖父の腹心だ」

「……おじい様の……」

「幼い頃のレディ・ケイナにそっくりでございます。ご立派になられましたな」

レスターの口ぶりでは、幼い頃の母を知っているらしい。キリエは目の前で跪く老臣をじっと見つめた。

「ベネディクトは」

ジュビリーが低い声で尋ねると、レスターは顔をしかめた。
「……今夜が山ではないかと」
それを耳にしたキリエは怯えた表情でジョンを振り返る。
「慌てないで、キリエ様。こちらへ」
ジョンがキリエの手を引き、中へ進む。
城の中はひんやりとしており、静まり返っていた。まだ昼過ぎだというのに薄暗く、陰鬱な空気に満ち満ちている。時折侍女たちが黙って急ぎ足で通り過ぎる。鮮やかな赤い絨毯が広い通路に敷き詰められ、暗い塔の中でぼんやりと浮かび上がる。
壁には甲冑や武器、防具が整然と並べられ、時折城主の家族らしき肖像画が掛けられている。キリエはそれらを見上げながら、歩みを進めていった。
「……義兄上（あにうえ）」
ジョンが前をゆくジュビリーにそう呼びかけ、キリエは少なからず驚いた。ファミリーネームが違うが、兄と呼ぶということは……？
「クレドの軍に準備をさせましょうか」
「そうだな」
ジュビリーが呟く。
「明日の朝にはここへ到着させろ」
「はっ」
ジョンが振り返ると、レスターが頷いて踵を返す。その様子を目で追っていたキリエが、立ち止まったジュビリーにぶつかりそうになって慌てて前に向き直る。
「兄上」
通路の先から若い女性の声が聞こえる。キリエがジュビリーの背から覗き見ると、貴族の令嬢と思しき女性がこちらへ小走りにやってくる。美しい黒髪を綺麗に結い上げ、凛とした端正な顔つきをしている。
「マリーエレン。来ていたのか」
「こちらから使いが参りまして……」

「……悪いのか」
ジュビリーの問いにマリーエレンは固い表情で頷く。そして、キリエに気づくと顔の表情を和らげた。
「レディ・キリエ・アッサーでございますね？」
「あ……、あの」
マリーエレンは跪いてキリエの右手に口を付けると微笑んだ。穏やかな顔つきの女性が現れただけで、キリエの気分はずいぶんと落ち着いた。
「マリーエレン・バートランドと申します。ジュビリーの妹にございます」
そして、懐かしそうに囁く。
「……そっくりですわ、ケイナ様に」
彼女も母を知っている。キリエは思わずじっとマリーエレンを見つめた。
「お疲れでしょうが、このままベネディクト様のお部屋へ……」
「は、はい」
一行は再び城内を行き、やがて塔の最奥部へと到着した。
「……」
部屋から医者らしい老人が出てくると、黙って一行を中へ招き入れる。部屋の奥には天蓋付きの寝台が置かれ、そこに数人の従者が佇んでいる。昼の陽光を遮る厚いカーテンから光が一筋部屋に伸びている。寝台には、六十代後半と思しき老人が横たわっていた。従者たちはキリエたちに気がつくと黙って寝台から離れた。
「キリエ様」
マリーエレンがそっと呟き、キリエの手を握った。キリエはマリーエレンの手をぎゅっと握り返し、そっと寝台へと近づいた。
老人はかすかに喘ぎながら呼吸を繰り返していた。灰色の髪が汗で額に張り付き、刻み込まれた深い皺が痛々しい。痩せた顔を取り巻く髭は伸び放題に伸び、細い首に無力に垂れている。
「……ベネディクト様」

マリーエレンが耳元で囁く。
「キリエ様でございますよ。ずっとお会いになりたがっていた……、キリエ様です」
「……」
ベネディクトはうっすら目を開けた。マリーエレンがキリエの顔を見上げ、キリエはおずおずと顔を祖父に近づけた。
「……おじい様……」
その小さな声で、ベネディクトの瞳が輝く。何度か瞬きをするとゆっくり顔を巡らせ、キリエを見つめる。
「……ケイナ」
ベネディクトの乾いた口から出た言葉は、孫ではなく娘の名前だった。
「……ケイナ……。わしのケイナ……！」
「ベネディクト様……！　ケイナ様ではございません。お孫様の、キリエ様ですよ！」
マリーエレンの呼びかけでベネディクトは顔をしかめ、まじまじとキリエを凝視する。すると、ジュビリーがキリエの背後までやってくると囁いた。
「……ベネディクト。あなたが十二年前、ロンディニウム教会に預けたキリエだ。あなたに会いに来たのだぞ」
「……キリエ……、キリエ、おまえなのか……？」
「おじい様」
キリエは思わずベネディクトの手を両手で握った。やせ細った手は、見た目からは信じられない力で握り返してきた。そして、ベネディクトの目から大粒の涙が溢れ出る。
「キリエ……！　お……、大きくなったな……！　会いたかったぞ……！　許してくれ……！　おまえには……、何もしてやれなんだ……。許してくれ……！」
キリエは顔を振ると、ベネディクトの首に腕を回すと抱きしめた。初めて会う祖父。これが血の絆なのだろうか。こみ上げてくる懐か

しさで胸が一杯になる。そして、ひたすら許しを請う祖父が哀れでならなかった。
「キリエ……。ケイナは、おまえの母親は、おまえを心から愛していた……。おまえが争いに巻き込まれぬようにと、教会へ預けるようわしに言い遺して死んでいった……。わしは……、でき得る限りおまえを守ろうとした。だが……、それも限界だ」
「……」
限界。その言葉を耳にしてキリエは顔を上げた。ベネディクトは力のこもった瞳でキリエを見つめた。
「おまえは……、わしの後を継ぐのだ。今からおまえは、このグローリアの領主、グローリア女伯爵だ。……これから先のことは、バートランドと……、レスターに任せてある」
「……伯爵様……」
「そうだ。彼らは何があってもおまえを守る。わしも……、天からおまえを見守る」
「おじい様！」
ベネディクトの表情が歪む。ぜいぜいと喉を鳴らし、震える声で囁く。
「……おまえには……、これから過酷な運命が待っている……。だが、決して……、くじけてはならん……！　おまえのためにも……、アングルのためにも……！」
アングルのために。その言葉がキリエの胸に突き刺さる。やがてベネディクトは呻き声を上げて咳を繰り返し、従者たちが慌てて周りを取り囲む。
「もうこれ以上は……」
医者も厳しい顔でジュビリーを見上げる。ジュビリーは頷くとマリーエレンに目配せする。
「キリエ様、おじい様を休ませてあげましょう。こちらへ……」
「ま、待って……。まだ聞きたいことが……」
マリーエレンが医者を振り返るが、医者は険しい顔つきで頭を振

る。マリーエレンは辛そうにキリエの手を引く。
「待って！　おじい様！」
従者たちが数人がかりでキリエを部屋から連れ出す。
「……」
喘ぐベネディクトを、ジュビリーが見下ろす。息を整えたベネディクトは顔を歪め、ジュビリーを見つめる。
「……これで、良いのだな……？　本当に、これで……」
ジュビリーは黙ってベッドの淵に跪き、ベネディクトの顔に耳を近づける。
「これで……、おまえの思い通りになった……。だが、忘れるな……！　キリエは……、キリエは……！」
「わかっている」
ジュビリーが囁く。
「キリエは、私の命がある限り守り続ける。……約束する」
ベネディクトは苦しげな表情でジュビリーを凝視するが、やがて頭を再び枕に沈めた。

「マリーエレン様、おじい様は……」
廊下を進みながら、キリエが不安そうに訴える。すると、マリーエレンが真顔で振り返る。
「いけません、キリエ様。あなたはこれから女王になられるお方。私などを敬称で呼んではなりません」
キリエは泣き出しそうな顔つきで立ち尽くした。
「ほ、本当に……、私が女王になれると……？　本当に、そう思っているのですか？　おかしいわ……。皆どうかしてるわ……！」
「キリエ様……」
マリーエレンは困ったように溜め息をつくと膝を曲げ、視線を合わせる。
「……無理もありませんわ……。十二年もの間、何も知らずに教会で過ごしていらっしゃったのだもの……。でも、アングルは今、あ

なたを必要としているのですよ。アングルの未来は、あなたにかかっています」
「そんなの、知りません……！　教会に帰らせて……！」
マリーエレンがどうしたものかと困惑していると、背後からジョンが呼びかけてくる。
「マリー様」
「ジョン……」
困りきった表情のマリーエレンと、涙ぐんで顔を強張らせているキリエの顔を交互に見やると、ジョンも眉をひそめて溜息をつく。
「キリエ様……」
「お、おじい様は心配だけど、でも、私、女王になんかなりません……！」
ジョンも腰を屈めるとどこか必死な表情でキリエに言い含める。
「まだキリエ様にはお話していないことがたくさんあります。あなたにご納得いただけるよう、今から義兄上が説明してくれます。ですから……」
あの冷たい表情をした伯爵から何の話があるというのか。キリエは目に涙を溜めたまま俯いた。そこで、マリーエレンがそっとジョンに囁く。
「ジョン、あなたもクレドへ帰るの？」
「ええ、マリー様もご一緒にクレドへお帰りになるようにと、義兄上が仰せです。クレドで軍を整え、明日王都へ向かいます。マリー様にはクレド城をお頼みします」
「軍？」
キリエが不安そうに問いかけると、ジョンは笑って答える。
「ご安心ください。イングレスへ攻め込むわけではありませんよ」
「では、ここも城の守りを……」
「そうですね」
二人のやりとりを聞き、キリエは不思議そうな顔で問いかけた。
「……マリーエレン様は……、ジョン様の奥様なのですか？」

「えッ？」
途端に二人がびっくりして振り返り、ジョンが顔を真っ赤にしてまくしたてる。
「ち、違います！　な、何を仰いますっ！」
「だって、マリーエレン様は伯爵様の妹君でしょう……」
ジョンがジュビリーを兄と呼んでいることを指摘するキリエに、マリーエレンが苦笑する。
「違うのですよ、キリエ様」
そして、少しだけ寂しげな表情で続けた。
「ジョンは……、兄の亡くなった妻、エレオノール様の弟なのです」
「えっ……？」
思いも寄らなかった言葉に、キリエは思わず絶句する。あの伯爵に、妻が。もちろんあり得ない話ではないのだが、ずいぶん意外な感じがした。しかも、すでに亡くなっているとは。
「……もう八年も前のことです」
少し遠くを見るような目つきでジョンが呟いた。ほんの少しの間、思い出に浸るような表情を見せるが、すぐにまた笑顔を見せる。
「それより、キリエ様。私のことはどうぞジョンとお呼び下さい。私など、田舎の子爵に過ぎません。もちろん、キリエ様が女王に即位されてからも、ずっとお仕えする所存です」
「でも……」
「そうですよ。あなたは女王になられるお方なのですから」
マリーエレンも先ほどのことを繰り返した。
「私のことはマリーとお呼び下さい。今からクレドへ帰らねばなりませんが、キリエ様の身の回りのことはこれから私が全てお引き受けいたします」
キリエは恐る恐る二人の顔を見比べた。ジュビリーと違って穏やかで柔らかな表情の二人に見つめられ、キリエは小さく頷く。そして深々と頭を下げ、どもりながら囁く。
「よろしくお願いします。……ジョン、マリー」

ジョンとマリーは顔を見合わせ、微笑んだ。
何とか気を落ち着かせたキリエを部屋へ連れて行く途中、マリーエレンが不意に足を止めた。壁に掲げられた一枚の肖像画を見上げるとキリエに指し示す。
「キリエ様。このお方があなたの母君、レディ・ケイナ・アッサーですよ」
「えっ」
言われて慌てて見上げる。そこには、上品な深いワイン色のガウンをまとい、ブーケを手にした若い女性が描かれていた。わずかに切れ長な瞳。微笑が浮かぶ唇。キリエと同じ、濃い栗毛。病弱にも見える、雪のように白い肌。確かに、キリエにもその面影がある。
これが、自分の母親……。今まで想像もできなかった母の姿。それが突然、こんな形で会おうとは。高名な画家の手によるものなのか、格調高い気品ある画風にキリエは思わず息をひそめて見つめた。
「……二五歳でお亡くなりになりました。キリエ様は、まだ二歳でいらっしゃいました」
二五……。キリエは思わず息を呑んだ。そんな年齢で、この世と別れを告げたのか。まだ幼すぎる娘を遺しての旅発ちは、どんなにか辛かっただろう。
「……マリーは、母をご存知ですか？」
「はい。お綺麗で……、静かなお方でした。キリエ様はよく似ておいでですわ」
上目遣いで母の肖像を見つめるキリエに、マリーがそっと肩に手をかける。
「私たちの領地は隣り合っていたので、よく遊びに来たものです。まるで、お姉様のようによく面倒を見ていただきました。私たちは幼い頃に両親を亡くしていましたから……」
マリーの懐かしさを噛み締める言葉に、キリエは思わず彼女を見上げる。そして、そっと肖像画を振り返る。絵の中の母は、心なしか寂しげに見えた。

夕方にマリーとジョンがクレドへ向かった後、キリエは部屋で夕食を出された。
「おじい様の容態は？」
「残念ですが……、よくありません」
侍女は暗い表情で短く答える。他にも色々聞きたいことがたくさんあったが、暗い表情の侍女にはそれ以上声をかけられず、また、侍女が答えられるかも疑わしかった。黙って食事を口に運んでいると、扉を静かに叩かれる。
「伯爵」
伯爵と聞いてキリエは思わず手が止まる。静かに入ってきたジュビリーは、立ち上がろうとするキリエを手で制する。
「少し外せ」
その一言で侍女は黙って部屋を退出していった。
「明日、夜明けと共にイングレスへ向かう」
相変わらず冷たい表情のまま、ジュビリーが言い放つ。
「クレドとグローリアの軍と共にプレセア宮殿へ入城し、王位の宣言を行う。おまえの出自を確認する作業があるだろうが、問題ないはずだ」
「ま、待って下さい」
キリエが青ざめた顔で口を挟む。
「お、王位の宣言って……、わ、私がですか？」
「おまえがしなくてどうする」
「ほ、本気なのですか。私が、女王になれると、本気でお考えなのですか？」
口ごもりながら問いかけるキリエに、ジュビリーは辛抱強く、ゆっくりと言い含めた。
「心配するな……。おまえが明日、王位を宣言したとしてもすぐ女王になれるわけではない。戴冠しなければ国民や議会から王位を継承したとは認められない。戴冠権を持っているのは、クロイツのム

ンディ大主教だ。イングレスの聖アルビオン大聖堂で戴冠式を挙げて、初めて女王に即位することができる」
ムンディ大主教。
プレシアス大陸及びアングル島で広く信仰されているヴァイス・クロイツ教の総本山、聖都クロイツの支配者。ムンディ大主教は精神世界における事実上の支配者だ。キリエはまさか大主教の名が出てくるとは予想しておらず、目を見張った。
「……大主教……」
ロンディニウム教会のような田舎の小さな教会にいては、一生拝謁の栄に浴することはないであろう人物。キリエは、ようやく自分の置かれた状況を理解し始めた。
「まずは王位の宣言を行い、国民と議会から支持を得た後にクロイツへ戴冠を要請することになろう」
「で、でも、私は修道女です！」
我知らず叫ぶキリエ。だが、ジュビリーの冷たい目に射すくめられ、恐れの表情が一段と増す。
「私は……、一生を神に捧げる誓いを……、修道誓願を立てた身です。祖父の後を継いで爵位を相続したり、その上、君主になろうなど……、大主教がお許しになるはずがありません……！」
「……それはどうかな」
思わぬ言葉にキリエは眉をひそめる。ジュビリーは腰を屈め、キリエの耳元で囁く。
「ムンディはむしろ、おまえがアングルの君主になることを望むだろうな。プレシアス大陸の強国、エスタドのガルシア王はヴァイス・クロイツ教を蔑ろにし、大陸の覇権を握ろうとしている。ムンディは、ヴァイス・クロイツ教の修道女であるおまえがアングル女王になることでエスタドを牽制できると期待するだろう。ムンディにとって悪い話ではない」
「そんな……」
思わず涙ぐむと、キリエは両手で顔を覆った。自分の信仰の指導

者が、そんな政治的駆け引きを望むなど、認めたくなかった。世界は、自分が予想していたよりももっと醜く、恐ろしいものなのか。
「……キリエ」
ジュビリーが更に言葉を続ける。
「……おまえにとっては受け容れ難いことばかりだろう。だが、時間がないのだ。早くしなければ、ガリアから冷血公が舞い戻る」
冷血公の名を聞いてキリエは体を震わせた。
「奴の悪評はおまえも耳にしているはずだ。あの男が王になれば……、間違いなくこの国は滅びる。それを止めることができるのはおまえだけだ」
「……」
キリエは恐る恐る顔を上げ、不安に満ちた目をジュビリーに向ける。
「待って。では、ルール公は、私の……」
ジュビリーは険しい顔で頷く。
「異母兄だ」
一瞬、部屋に冷たい空気が張り詰める。キリエはかすかに体を震わせた。だが、そんな彼女にジュビリーは更に追い討ちをかけた。
「それだけではない。王位継承権を持つ者は他にもいる。レノックス・ハートがガリアで戦っている相手……。王太子ギョーム、彼もだ」
「えっ……！」
「彼はガリア王リシャールと、王妃マーガレットの嫡男だ。マーガレット王妃はエドガー王の妹。つまり、アングルの王位継承権とガリアの王位継承権、どちらも保持している。おまえにとっては、従兄にあたるわけだが」
なんということだ。キリエは呆然とした。プレシアス大陸の覇権をかけた戦いの渦に、今から自分は身を投じようとしている。だが、それでもまだ、自分のことではないような感覚がどこかにあった。これは、どこか遠い異国の話。自分はその物語を聞いているだけ…

…。

「レノックス・ハートを君主にするわけにはいかん。とは言え、異国の王太子を君主に迎えることも避けねばならん。おまえが女王になれば、アングルが望む未来になる」

ジュビリーはそこまで語り終えると、キリエの疲れきった表情に気づき、そっと肩に手をかける。

「……疲れただろう。食事を済ませたら早く休め」

キリエは無言で頷くが、その瞳は空ろだった。

今日という一日は、自分にはわからないことの連続だった。精神的にも肉体的にも疲れきっている。考えなければならないことが多すぎる。そして、考えてもわからないことだらけだ。

ジュビリーの言葉が脳裏に蘇る。彼は自分を女王にすると言った。遠縁だとも言った。つまり、自分を女王にして、彼は宰相になるつもりか。ヴァイス・クロイツ教では、十八歳に達して初めて成人と認められる。キリエはこれまで孤児として育てられてきたため誕生日がわからず、聖ロンディニウムの祝祭日である六月十日を誕生日の代わりに祝ってきた。つまり、今月十四歳になったばかりだ。成人までには四年ある。四年もあれば、この国を手中に入れられる。

自分が今まで知らずにいた世界が、自分を中心に動こうとしている。そのことにキリエは怯えながら、疲れを癒すためではなく、現実から逃避したいがために寝床へと就いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3391z/

女王キリエ

2011年12月11日18時52分発行